

社会科の主張

勝又悠太 望月慈希

1 教科で育みたい人間像

社会科では、単に社会に適応して生きる人ではなく、よりよい社会のあり方を追求し続ける「社会に参画し、創り続ける人」を育みたいと考えている。私たちは、社会科を「社会的事象の追求を通して『社会の中でどのように生きるか』について考えをもつ教科」と考える。「社会」とは、家族や地域、国家、世界など、何らかのつながりをもった人々の集まりであり、「社会的事象」とは、社会における現在や過去の人々の営みのことを指す。

先人達はある社会的事象に出会ったとき、空間的、時間的な視点からとらえ、そのよさや問題点、またはそれに携わる様々な人々の考えを吟味しながら、よりよい社会のあり方を追求し続けてきた。その積み重ねが今の社会の姿を形づくっている。私たちが生きる時代は、SDGsの広がりやAI時代の到来など、人々の生活や社会が急速に変化する中で、新たな価値観がうまれるなど、予測困難な時代を迎えている。さらに、多様性を認め合う動きがある一方で、価値観の違いや利害関係による対立が表面化し、合意を導き出すことが難しい状況も見られる。そのような状況であっても、未来に期待を抱き、よりよい社会を自分たちの手で創りあげていくために、自己の立場や状況を意識するだけでなく、他者が重視することやその人が置かれた立場を理解したうえで、すべての人々にとって最善の結論を導き、実現を目指し行動しようとするのが大切だと考える。

2 教科で願う子どもの学び

私たちが願う子どもの学びとは、課題解決に向けて、根拠に基づいた自分なりの考えを、よりよい社会の構築に向けて発展させていくことである。子どもたちはある社会的事象に出会ったときに、「解き明かしてみたい」「これはみんなで考える価値がありそうだ」「なぜだろう。おかしいのではないか」などといった思いから、全員で共有する問いが生まれ、社会的事象を追求していく。子どもたちが社会的事象を追求していく過程で「位置や空間的な広がり」「時期や時間の経過」「事象や人々の相互関係」に着目してとらえ、比較、分類したり統合したり、地域の人々や国民の生活と結びつけたりしながら考察して、自分なりの考えをもっていく。自分なりの考えを語り合う中で、現実の社会とのつながりを感じ、社会的事象の矛盾や現実とのギャップに着目したり、他者の異なる考えや価値観に出会ったりして、自分の考えを発展させていく。私たちは、このような学びが子どもたちの中で生まれることを願っている。

私たちが願う学びを実現するためには、授業の中で「様々な解釈の仕方や多様な価値観を尊重しながら、『すべての人にとって最善の社会のあり方』を創りあげていく営み」を巻き起こしていくことが必要だと考える。そのような営みには、多様な他者の存在が必要不可欠である。自らの考えをより深めたり、広げたりするために、多様な他者とかわり、語り合い、考察することが重要である。かわり、語り合うことで自分だけでは気づくことができなかつた視点からとらえたり、異なる立場に立って考えたりすることで、公正な判断や、より合理的な結論を導くことができる。その過程で対立や解釈のズレが生じたときにこそ、考えの根拠や互いの価値観について語り合い、相手の見方や考え方に対する理解を深め、互いが納得できる社会の姿を見いだしたり、新たな社会の姿を創りあげたりするだろう。

本年度の授業実践と分析

授業実践



1 題材名 「第一次世界大戦後の世界はどのように変わったのか」 (第3学年)

2 本題材で願う学び

「第一次世界大戦後の世界はどのように変わったのか」を追求する活動を通して、時代背景や歴史的事実に基づきながら、戦勝国、間接的に戦争にかかわった国、敗戦国、植民地それぞれの立場になって考えたり、それぞれの立場の国の戦後の社会の様子を比較したりすることによって「第一次世界大戦後の世界は平和と言えるのか」を語り合い、「平和の構築のために大切なこととは何か」について自分なりの考えを見出す。

【学習指導要領との関連：C近現代の日本と世界、(1)近代の日本と世界、ア(オ)第一次世界大戦前後の国際情勢と大衆の出現】

3 本題材の実際の流れ

時間	問い	学習内容
1	平和について語り合おう	<ul style="list-style-type: none"> 子どもたちは平和についてどう考えるか意見を共有し、平和とは一体どのような状態を指すのか、なぜ戦争は起きるのかなどを語り合い、平和と戦争の関係性についての興味を深める。
2～5	第一次世界大戦はなぜ起きたのか、どのような戦争だったのか	<ul style="list-style-type: none"> 平和を構築のためにどうすべきなのか追求したくなった子どもたちは、第一次世界大戦はなぜ起きたのかという問いを共有し、第一次世界大戦について調査を始める。 自分たちで見出した視点から調査し、語り合うことで第一次世界大戦の概要を理解する。その中で今と当時では戦争に対する価値観が大きく異なることに気づき、当時の価値観が現代に至るまでにどのように変化していったのかという問いを共有する。
6	今と昔で戦争への意識は違うのか	<ul style="list-style-type: none"> 第一次世界大戦の様子や世界の動きを根拠としながら、第一次世界大戦とそれ以前の戦争の違いについて語り合う。 第一次世界大戦後の世界の様子を知りたい、第二次世界大戦とのつながりを見出したいという思いをもつ。
7・10	第一次世界大戦後の世界はどのように変わったのか	<ul style="list-style-type: none"> 第一次世界大戦後の世界がどう変わったのかを見出すために、戦勝国、間接的に戦争にかかわった国、敗戦国、植民地を視点として調査を進める。 様々な立場から戦後の世界の動きを見ていく中で世界は平和に向かっているという考えと、変わらず自国の利益を追う世界であると考えが出される。

11	<p>第一次世界大戦後の世界は平和と言えるのか</p> <ul style="list-style-type: none"> 平和を求める運動や国際連盟の創設など平和に向かおうとする姿勢を評価する子ども、利己的な国が多く第二次世界大戦が起きることから平和ではないという子どもなど様々な立場、視点から議論がなされる。その中で子どもたちは、基準となる平和とは何なのか、平和に必要なものは何なのかについて語り合っていく。
----	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

4 「ありたい自分」を思い描く子どもについて

(1) 「ありたい自分」を思い描く子どもの姿とその場面

本題材の第1時、第6時、第11時において見られたありたい自分を思い描く子どもの姿は以下の三つである。なお子どもの発言は要約して書き出した。

ア：現実とのつながりから見出したいと考える子どもの姿

第1時「平和について語り合おう」

- 戦争のデメリットについてだが、例えばロシアとウクライナの戦争にロシアが勝ったとしてもそのあとの他国からの印象がどうなるか考えると、明らかに不利になるし、貿易なども全て停止になると思う。のちのことを考えると戦争なんかしない方がいい。

第6時「今と昔で戦争への意識は違うのか」

- 第一次世界大戦前は各国がより強い力を求めているように思う。植民地をたくさん持っている国が強かったから土地を求めていった。けれど今は経済的な意味での発達を求めている、文明的な発達を求めたりしている。そもそも求めている発展の仕方が違う。

第11時「第一次世界大戦後の世界は平和と言えるのか」

- 平和には各国の自立、全ての人の安定した生活、経済の安定の三つが必要だと思う。まず国が自立していないということは植民地だということだが、植民地の中には何かしらの不満が必ずある。この不満は国が自立していないから、安定した生活を得ていないから、他国に経済状態を支配されていることから生まれる。今のアフリカを考えればわかるが、ずっと植民地だったから安定していない。それと軍隊をもたないことが必要。各国が軍隊をもっているとどうしても今のロシアのように野望を生み出してしまふ。他国の侵略をして国力を高

めるという当時の考え方を無くすために軍隊、武器をもたないことが大切だと思う。とてもではないが第一次大戦後の世界は平和とはいえない。

上記三つの発言は現在の世界の様子や現実に行き起きている事象を、子どもなりにテーマと結びつけている姿だと言える。子どもたちは現在の社会情勢を、自分と遠く離れたものとして認識するのではなく、身近なもの、自分とつながりのあるものだととらえていると考えられる。社会の授業の中だけの学びではなく「授業を通して現実社会を学ぶ」姿の一端だと言えるだろう。

イ：歴史的な事象とのつながりから見出したいと考える子どもの姿

第1時「平和について語り合おう」

- 戦争から生まれる平和もあるのではないかと。日本も第二次世界大戦を経て、戦争がない状態になっている。戦争があったからこそ、今戦争がない状態になっている。

上記の発言は、日本の第二次大戦への参戦、太平洋戦争での敗戦、戦後の復興を意識した発言である。小学校の歴史学習で歴史の流れは大観しているが、まだ中学校では扱っていない。したがって子どもが、これらの歴史的な事象についてどれほど理解しているかはわからない。しかし、歴史的な事象のつながりを意識して考察しようとしている姿と言える。

第6時「今と昔で戦争への意識は違うのか」

- 様々な利害関係が絡み合っていて世界中の国が争っている。過去は一つの国と一つの国の戦争だったが、様々な条約が結ばれているため直接的に関係ない国が巻き込まれていってしまった。第一次世界大戦前まで攻め込まれたとしても自己責任だった。

第11時「第一次世界大戦後の世界は平和と言えるのか」

- 資料を見ると第一次世界大戦の死傷者がとんでも

ない規模だった。第二次世界大戦まで大きな戦争がこれ以降は起きていないのでこれほどの死者はでていない。自分が考える平和は死者がでないことが第一だと思う。第一次世界大戦中は生活が苦しかったり、徴兵されたりして大変な状態だった。敗戦国は戦後もひどい状態だったが、国際連盟ができ平和に向かう動きがでている。第一次世界大戦を基準として考えれば平和と言える。

第6時、第11時での発言は、第一次世界大戦について調査で明らかになった事実と過去の歴史で学んできた事実を比較し、考察している姿である。さらに歴史的な事実や根拠を明らかにしながら、語り合っているテーマについて自分なりの価値判断を加え考察している姿が見られる。

ウ：地理的な事象とのつながりから見出したいと考える子どもの姿

第1時「平和について語り合おう」での発言

- ・資源の貧しい国は生きていく上で資源の豊かな国から資源を得ないと生きていくことができない。生きるためには仕方なく戦争は起こってしまい負のループが生まれてしまう。貧しい国は戦争を無くすとか、平和について語るができないのではないか。

上記の発言は、単に平和が倫理的、感情的にどうであるかではなく、資源やその国の地理的条件から考察しているものである。「資源の豊富な国」「資源の貧しい国」というようにその国が置かれている状況や立ち位置によって「平和」に対する考え方は異なることに気づいている。平和について多面的に考えている姿と言えるだろう。なお第6時「今と昔で戦争への意識は違うのか」第11時「第一次世界大戦後の世界は平和と言えるのか」では分類できる発言は見られなかった。

エ：根拠をもって語りたいと考える子どもの姿

本題材での子どもたちの発言を追っていくと発言の質が変わっていることがわかる。第1時の発言を見ていくと、子どもたちは過去の学びや自分が知っている事柄をもとに語りしており、具体的な根拠を挙げながら話す子どもは少なかった。それが第6時においては第一次世界大戦の歴史的な事実や資料、データを基に考察している姿が見える。そして第11時では調べた事実や仲間との語り合いで得た仲間の意見などを基に自分の意見を再構築したり、自分なりの価値判断を加えて

発言したりしていることが見える。これまでの学びで得た知識、構築された自分に、調査や学習を通して新たな知識を得たうえで価値判断し自分自身を更新しているのだろう。

ア～エはいずれも社会科らしくありたいと考える子どもの姿であると言える。上記にア～ウのありたい自分を思い描いている発言を分類して記載したが、ア～ウが混在しているようにとらえられる発言もある。子どもたちは社会の授業の中で、社会科らしくふるまいたいと思い描きながら学んでいると考えられる。

(2) 授業者の「教科で願う学び」との関連

子どもたちの「ありたい自分」と考えたア：現実とのつながりから見出したいと考える子どもの姿、イ：歴史的な事象とのつながりから見出したいと考える子どもの姿、ウ：地理的な事象とのつながりから見出したいと考える子どもの姿、エ：根拠をもって語りたいと考える子どもの姿は「教科で願う学び」と関連していると考えられる。社会科部では「教科で願う学び」として以下のように主張に記載している。

「位置や空間的な広がり」「時期や時間の経過」「事象や人々の相互関係」に着目してとらえ、比較、分類したり統合したり、地域の人々や国民の生活と結びつけたりしながら考察して、自分なりの考えをもっていく。自分なりの考えを語り合う中で、現実の社会とのつながりを感じ、社会的事象の矛盾や現実とのギャップに着目したり、他者の異なる考えや価値観に出会ったりして、自分の考えを発展させていく。

ア～エの「ありたい自分を思い描く姿」と主張を比べると重なっていることがわかる。以下の表に重なっている部分を記載した。

ありたい自分を思い描く子どもの姿と教科で願う学びとの関連性

ありたい自分を思い描く子どもの姿	教科で願う学び
ア：現実とのつながりから見出したいと考える子どもの姿	「現実の社会とのつながり」
イ：歴史的な事象とのつながりから見出したいと考える子どもの姿	「時期や時間の経過」 「事象や人々の相互関係」
ウ：地理的な事象とのつながりから見出したいと考える子どもの姿	「位置や空間的な広がり」
エ：根拠をもって語りたいと考える子どもの姿	「課題解決に向けて、根拠に基づいた自分なりの考え」

なぜこのような重なりが見られたのか考えてみたい。

ア：現実とのつながりから見出したいと考える子どもの姿と「現実社会とのつながり」

これは題材を通して共有した「平和について語る」というテーマが大きいだろう。「平和」という言葉は抽象度が高く、立場や視点、時代によって異なるものである。だからこそ時代を越えて語れるものであるし、現在の世界情勢ともつながっている。子どもたちは歴史を学ぶために平和について考えたのではなく、平和について考えるために歴史を学んでいたと考えられる。このようにみると時代や社会を大観するテーマや問いの設定がアのありたい自分を思い描くために必要なことだと言えそうである。

イ：歴史的な事象とのつながりから見出したいと考える子どもの姿と「時期や時間の経過」「事象や人々の相互関係」

ウ：地理的な事象とのつながりから見出したいと考える子どもの姿と「位置や空間的な広がり」

イ、ウの姿と教科で願う学びの関連性が見えたのは1、2年生における地理、歴史の学びが大きいだろう。「時期や時間の経過」「事象や人々の相互関係」は歴史の学習を進める上で必ず教師も子どもたちも学ぶ上で意識していることである。「位置や空間的な広がり」はまさに地理での学びそのものだと言えるだろう。1、2年生の学習において比較、分類したり、結び付けたりしながら学習を進めており、子どもたちは社会の学び方を身につけていると考えられる。今回は学びを積み重ねてきた3年生を分析したため、イ、ウの姿につ

いては1、2年生の姿から分析をする必要もあるだろう。

エ：根拠をもって語りたいと考える子どもの姿

問いに対する答え見出すには、感覚的なことだけでなく、事実やデータに基づくことが重要である。子どもたちの自分の考えを伝えたい、相手を納得させたいという思いが根拠をもって語る姿へとつながっていると考えられる。

これら以外に私たちが願ってはいないが見えた子どもの思い描くありたい自分がいくつか見られた。例を以下に記載する。

- 戦争は敗戦国に大きな損害がでる。強い国に対してのメリットは大きい弱い国は戦うことができない。戦争を行うと国家同士の間関係が決まってしまう。
- 第一次世界大戦後は戦争への意識が変わり、平和がいいと思ったはずだし、平和を求める動きがでたはずだと思う。第一次世界大戦後から第二次世界大戦につながるイメージがもてない。

このように見ていくと、子どもたちは題材を通して私たちが願っている以上に学びを深めているように感じる。今後はさらに子どもの姿に注目して研究を進めていきたい。

本年度の実践における成果と課題

1 実践を通して見いだした社会科における「ありたい自分を思い描く姿」

先述した授業実践では、「現実とのつながりから見出したいと考える姿」「歴史的な事象とのつながりから見出したいと考える姿」「地理的な事象とのつながりから見出したいと考える姿」「根拠をもって語りたいと考える姿」の四つの姿をありたい自分を思い描く姿と考察した。他分野（地理的分野・公民的分野）の授業実践や他学年の授業実践においても、同様の姿を見とることができた。

このような子どもの姿の共通部分をまとめていくと、「つながりを見出して考える姿」が社会科におけるありたい自分を思い描く姿であると考察できる。つまり、子どもが何らかのつながりに気づいた際、社会科らしい追求活動が促進されるということである。本年度の実践を通して社会科部が考えたつながりを以下のように整理する。

- 社会的事象と社会的事象のつながり（歴史的な事象・地理的な事象）
- 社会的事象と自分とのつながり
- 他分野とのつながり
- 社会的事象と現実社会とのつながり
- 自分の考えと他者の考えのつながり
- 自分の考えとその根拠となるものとのつながり

2 成果と課題

(1) 成果

第一次世界大戦がどのような戦争であったのかを追求していく子どものようすは、課題解決に向けて、時代背景や時間の経過、社会的事象の相互関係に着目し、比較、分類したり統合したりしながら、根拠を求めながら自分の考えをもつことができた。そのような活動の中で、子どもが進んで他者とかかわり、自らの考えを深めたり、広げたりする姿が多く見られた。つまり、社会的事象同士のつながりや、他者の考えとのつながりなどを通して問いを追求することで、それぞれの子どもの思い描く「ありたい自分」が表現されていったと言える。特に、題材の終末では、問いと自分とのつながりや現在の社会情勢とのつながりを見出していき、よりよい社会の構築に向けた考えを述べる姿を見ることができた。このような姿は、社会科の願う学びである「課題解決に向けて、根拠に基づいた自分なりの考えを、よりよい社会の構築に向けて発展させていくこと」に、合致していると考えられる。

また、題材と自分とのつながりを見出した子どもは、社会の中で見られる社会的事象や時間や地域を越え、社会の中で生きる自分とつながっていることに気づき、「社会の中でどう生きるか」というところまで考えが及んでいった。このような子どもは、よりよい社会のあり方を追求し続けることができるだろう。そして、進んで社会に参画し、社会の中で生きる一人の人間としての自覚をもって社会を創り続けることだろう。

(2) 課題

子どもたちがつながりに気づくような問いやそのための授業構想を整理していかなければならない。特に、社会的事象と自分とのつながりや社会的事象と現実的な社会とのつながりである。なぜなら、よりよい社会への構築に向けて自分の考えを発展させていくためにはそのようなつながりに気づくことは不可欠であるからだ。そのためには、例えば、課題となる問いや調査するための問い、本質に迫る問いなど、子どもたち一人一人の学びの経過を見とりながら、授業者が問いを整理し、吟味していかなければならないだろう。

また、子どもが根拠に基づいて自分の考えをもてたかという点では、はっきりしていない部分が多いように感じている。本年度の願う学びには「根拠に基づいた自分なりの考えをもつ」という要素が示されていたが、何が根拠として示されるべきなのか、何が根拠となり得るのか、など整理していかなければならないだろう。

参考文献・参考資料

- 黒田日出男 他（2020）『社会科 中学生の歴史 日本の歩みと世界の動き』株式会社帝国書院。
- 関幸彦（2013）『武士の誕生』株式会社講談社。
- 松田陽三（2018）『日本史の論点』中央公論新社。